

専門職と一般人のあいだ

徳江与志子

群馬大学医学部保健学科作業療法学教員、「まゆの会」会員

私は大学の保健学科で作業療法学を教えているが、ダウン症児をもつ親の会「まゆの会」の一会員でもある。

「まゆの会」は結成5年め、30家族が入会している。今までのところ、私はここに専門職としてではなく親の立場のみで参加している。作業療法士として10年間臨床で過ごし、現在は教育に携わっているが、親の会にはどのように専門職としてかかわったらよいのか、答えが見つからず、時間的余裕もないことを理由に、専門職の部分は後ろにおくようにしていた。そこにはとまどいめいたものもあったのかもしれない。

しかし、親の会で得たものは自分では意識しないまま大きく深くなっているようだった。今まで視野に入らなかったたくさんのことが見えるようになってきた。「環境」と

「時」に明らかに自分の行動は変えられたと感じる。

「まゆの会」はセルフヘルプグループの一つだが、セルフヘルプグループの定義は“自分自身の問題を自分自身で解決するために、意図的かつ自主的に結成し、しかも専門職から独立した運動を展開している持続的な小集団”とする文章を読んだことがある。セルフヘルプグループでは、みんな同じような問題をもっているという意識から所属感と安心感をもつことができる。例会での会話は

ある種のあいまいさを伴う表現だが、やわらかく暖かみがあり、親しみやすい。ぐちを言い合ったり情報の交換もする。
「おすわりができるようになった

の」「就学時健診にどう作戦をたてた?」「〇〇にこんなことを言われた」「市の乳児検診は行きたくない」等々。

育児の不安、生存への不安、将来に対する不安、それらも毎月の会合に参加すると緩和される。障害児と親への援助が十分といえない地域が多い現在、セルフヘルプグループの存在は貴重である。

セルフヘルプグループへの専門職の協力という

ことでは賛否はあるが、たとえば医学に関する疑問は一般人には解消しにくい。そのような時、医師のサポートはやはりありがたい。ある時、会報に医学記事の執筆をお願いした小児科医師は「できることは協力するわよ。自分の勉強にもなるし」とおっしゃって、ボランティアで快く引き受けてくださった。

私自身、専門職の立場にあるので、親の会にいてスタンスのとり方に迷う時がある。専門家がこうすべき、ああすべきと引っぱってしまうことがあってはならない。私自身の協力のしかたとしては、セルフヘルプグループの意義を理解し、社会資源としてとらえること、そして私自身仕事の上でノーマライゼーションの理念をわが物として地に足をつけた実践を行なっていくことと考えるに至った。

セルフヘルプグループと適切な距離をもつてくださる、先ほどの小児科医師のような専門職の協力者がたくさん増えて下さることを願う。

